

A—31 近世社会における食生活構造の地域性と
その変動過程について

—郷土関係往来の分析を中心として—

和洋女大文家政 石川松太郎
東京教育大付属坂戸高 ○佐久間尚子

1. 近世社会では、強固な大名領国制と、その支配統制下に郷村制が確立されるに及んで、地域地域によって独自の生活構造が形成され、生活習慣がつくられるに至った。食生活も例外ではなく、とりわけ、使用食品・食事形式・食習慣などによく現われている。本研究は、特に使用食品の面から食生活における地域性の形成過程を調査し、あわせて商業資本主義の拡大や交通運輸の発展等に伴って、こうした地域性が、どのように変動してゆくかを究明して、今日の食生活における問題点の所在を突止めようとする。

2. 近世に作成された郷土関係往来（郷土教科書）のうち、大都市関係7種・東北北海道関係7種、関東関係3種・中部関係7種・近畿中国四国関係6種の合計30種を資料とし、これらが収めている食生活に関する語彙や記事を拾いあげ、カードにとって、様々な統計的処理を加えた。そして、食生活の地域性とその変動過程の具体相を明瞭ならしめようと試みた。

3. 近世食生活の地域性は、郷村制の進展と相まって、郷土食として自覚的に推進されていった。と同時に、商業資本や交通運輸の発展により、使用食品・調理品・食事形式等、全国共通の色彩が濃くなっている。このように、地域の独自性を強調しようとする方向と全国的な傾向に従おうとする方向と、この2つの方向が、結ばれたり、対立・緊張関係にたったりした所に、近世食生活の特質があることを明らかにしえた。